

第一朗読 (イザヤ55章10―11節)

10 雨も雪も、ひとたび天から降れば

むなしく天に戻ることはない。

それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ

種蒔く人には種を与える

食べる人には糧を与える。

11 そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も

むなしくは、わたしのもとに戻らない。

それはわたしの望むことを成し遂げ

わたしが与えた使命を必ず果たす。

福音 (マタイ6章7―15節)

7 また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられ

ると思い込んでいる。8 彼らのまねをしてはならない。あなたが

たの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。

9 だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、

御名が崇められますように。

10 御国が来ますように。

御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

11 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

12 わたしたちの負い目を赦してください、

わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

13 わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。15 しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

朗読から祈りへ

—すべての人の祈り—

アメリカ合衆国の大統領就任式で宣誓の前にカリフォルニアの牧師が祈りを先導した。その祈りの結びは「主の祈り」だった。氷点下の寒空の下、二百万人ほどの人々が沈黙の中で祈った。中継を見ている世界中の人々も祈ったに違いない。最近オバマ大統領の（就任）演説が話題になっている。演説集やCDも出版されベストセラーになる勢い。就任演説にも感動したが、わたしは先の牧師の祈りに深い感動を覚えた。二十一世紀は超教派の時代と想っている。平和は諸宗教が教派を越え、文化が共存することで築かれると思っている。

ワシントンの緑地帯、ナショナルモールに集まった人たち、そして就任式の中継を見ていた世界中の人たちが「天の父」に向かって祈った。子どもも大人も。違った肌の色、違った文化、違った宗教、違った育ち、違った国の人々が祈った。神を「父」と呼んで。神に「おとうさん」と呼びかけて。それはまさに子どもとしての祈りであった。そして、その祈りは子どもの願いが

実現することを求めた祈りではなく、まず「お父さん」の望みが実現するようにと願う祈りだった。イエスが教えたように…。

—神の思い—

二〇〇五年の秋に教会（小教区）の創立五〇周年を祝った。三年前から準備を始めた。しかし、実行委員会というような組織ができたのは記念の年になってから。記念式典の予算が決まったのは式典の五ヶ月前だった。それまでは何をしたのか…。「神は何を望まれるのか…」「神はどのように記念することを望まれるのか」をずっと探った。とくに主日に読まれる聖書の言葉を通して。皆で感謝を表すこと。皆で神の元に集うこと。皆で神を「お父さん」と呼ぶこと。そのことが意識された。

具体的な方法。まずは皆に知らせること。そのために名簿の整理をした。少なくとも小教区に所属する人が全員記念日を知るように。だれにも招待状は出さずに案内状を出した。必要経費を集めるために、すべて無記名の自由献金をした。当日の感謝の祭儀は隣接の幼稚園のグラウンドで行われた。客人はいない。したがって招待客のリボンもないし、祝儀も受けない。食べ物はすべて持ち寄り。ミサが終

わるとその場が祝賀会場に早変わりした。参加者みずからの手で。司教や客人のための特別なテーブルなども料理も無い。メインテーブルのない祝賀会。皆、神の前で「子ども」。祝典の主役は「お父さんである神」。お父さんのおかげで今ここに皆がいる。小教区の所属信者数の倍近い一〇〇〇人が集った。「神がする」と思えば、それは実現する。ただし人間の協力がなければ実現しない。

—主の祈りだけで—

ある研修会でのできごと。終わりのまとめの全体集会で一人の高齢の方が発言した。「最近の人は祈りを知らない。とくに成人洗礼の人は祈りを知らないし、祈りをしていないようだ」。一人の男性が手を上げた。「わたしは祈りをたくさん知りません。『主の祈り』で十分だと思えます。わたしは毎日、こころを込めて『主の祈り』を唱えています」。

「主の祈り」で十分…。なかなかこうは言えない。簡単すぎて、楽すぎて…祈りをした気分にならない？ 「主の祈り」を祈る人は神の思いを実現しようと動く。自分の思いを「神の思い」と思い込まないように。聖霊の助けを願う気持ちで「主の祈り」を唱える。(MMY)